





(十八)

しばらく、久美子は、人を捜しながら、歩き回っても、誰にも、出会う事が無く、人のいる気配も無い、静まりかえった、お寺の本堂らしきところの、階段に座り込んでしまった。

久美子は、ただ、期待感と不安で、怖くて、気分が悪くなるほどだった。

そんな、久美子にとっては長い時間が過ぎて、緊張のあまり、疲れて、体がくずれ落ちそうになって、座ったまま、動けずにいた。

気がつくと、久美子の前に、年老いたお坊さんが立っていて、声をかけてくれた。

久美子は、なぜか、すべての事に安心出来る、ほっとしたような気持ちになって、言葉が出てこないまま、お坊さんの顔をぼんやりと眺めていた。

力のない挨拶して、立とうとしたが、体が動かない！

お坊さんに助けられて、本堂の中へ入った。

「ここで、少し体を休めなさい！」

お坊さんは、優しい口調で言ってくれた。

畳の敷いてある大きな部屋で休ませていただいた。

しばらくして、白湯を持って来てくれて、

「ひとくちでも、お飲みなさい！」

とすすめてくださった。

しばらくの間、久美子をひとりにしてくれて、落ち着いた頃に、久美子のそばに来た。

「遠いところから、来られたようですが！」

「ご苦労なされました事でしょうな～」

「どなたか、尋ね人が、おるのですね！」

「この寺には、私のほかに、もうひとりいますが！」

「その人は、今は、ここにはいませんが！」

そう言って、久美子がたずねようとする事を、すでに、知っているような、心を読み取られているような思いがした。

春馬が、ここにいるかどうか、言い出せぬまま、時間が過ぎて行った。

その夜はこのお寺さんで休ませて頂き、次の日に少し、世間話をした後！

お坊さんは、貴方の悩みがどんなものか分かりませんが、この話を聞いて、貴方の心が休まればよいのですが！

そう言って、話し始めた。

「少し前に、大変な戦争があつて、人間の心を無くした者が多かつた」

ある少年は、ある少女に、淡い恋心を抱いたまま、少年兵として志願して行った。

その少年に強く少年兵に志願する事を、ある教師がすすめ、少年はそのすすめを信じて、少年兵に志願して軍に入隊した。

少年が配属された部隊は、毎日、毎日、お国の為に死ぬ事が美德だと教え込んだ！

少年に入隊をすすめた、教師にも同じ事をおしえられた少年は国の為に死ぬのだと思いつめて信じていた。

そして、戦場に行き、現実の戦争のあまりにもひどい、人間の醜さを知った！

地獄の苦しみの中で、生き残る為に人間として、最悪の行為をして、生き延びた。

そして、戦争が終り、家に帰れたが、戦場での悪夢が消えず、少年は大人になって、悪の限りをつくし、他人を痛めつけて、周りの者を泣かせても、何の悔いも、痛みも感じない人間になっていた。

昔、恋心を抱いた少女だった女性に、男としての欲望を満たすだけの行為！

肉欲を満足させるだけの為に、酷い乱暴な行為で、汚して犯してしまった。

大切な女性だったはずの人を！

その女性は、男が純粋だった頃、国の為に死ぬ事が美德だと教え続けた教師の年の離れた妻になっていた。

その事が、男を狂わせて、悪に走り、他人をいたぶる事でしか、生きる意味を見出せずにいた、だが、男の汚した女性といつしか心を通じ合う仲になった時、人間の心を取り戻したが、それからの苦しみに耐えられずに、仏門に入って、逃げたけれど、いまだに、その男は、誰からも、何からも、逃げる事は出来ずに、仏さまに祈りを捧げる生活がつづけている！

(十九)

人が生きると言う事は罪をおかしながら、くい改めながら、この世を生きる事なのかも知れない！

そう言って、お坊さんは、にこやかに、微笑んだ！

このお坊さんの事がどうかはわからないが、久美子は、ひとつの区切り、心の中にあった、重石が、軽くなったような、気持ちが楽になった気がした。

三日ほど、このお寺にお世話になって、お坊様の話された事が序じよに、わかりかけてきた、そんな思いになって行った、久美子が、この寺を立つ事を告げた時、お坊さんは、もう一人のお坊さんのいる事を話して、気が向いたのなら、「会ってみなさい！」

「貴方が捜し求めた者が居るかも知れない！」

そう言って、この寺の奥の院と言われた、場所をおしえてくれた。

険しい岩道をよじ登り、滝の音が聞こえてきた。

その滝つぼの脇の小高い場所に、やっと人ひとりが、寝起き出来るのかと、思えるほどの、粗末な小屋があった！

その中で、ひとりの修行僧が、瞑想していた！

その姿は、久美子がたやすく声をかける事も、近づく事などしてはいけないのだと悟らせてくれた、久美子は立ち止まり、後姿を静かに見ていた、その、うしろ姿は！

『まさしく春馬！』

どんなに、風貌が変わってしまっても、見まちがう事のない人！

けれど、久美子を寄せ付けない、威厳を感じて！

又、久美子は、すべてを悟り、もう、罪意識や、苦しみから、解放してあげる為に、久美子は、春馬には、今、逢ってはいけないと、諦めて、その場を静かに離れた・・・

苦悩するしかばねの美しい魂

もはや私など近づいてはいけない

自然との会話に耳をかたむけて

木々の囁く声を友にして

月の光に夜の虹を描く

久美子にとって、無常なまでに時はゆっくりと流れたが、世間と言う世の中は動き、普通に過ぎて行く・・・

久美子の実家を守っていた、姉夫婦は、子供に縁が無かった、一人息子を幼くして、亡くしてからは、授からなかったようだ。

それでも、夫婦は穏やかに暮していたと思っていたが、義兄が突然、脳出血で、倒れて、不自由な体になってしまって、義兄の望みで、久美子の実家のある、山里を離れた。

久美子は、確かに、父の甥や姪は、あの山里に住んではいたが、元々、親戚づきあいの無い血縁者であったから、心寂しさもなく、もう、他人も同然、むしろ、久美子は、姉夫婦が、実家をたたんでくれた事で、気持ちの整理が出来たように思った。

「もう、私には、帰る場所が無い！」

「心を残す、ふるさとが無いのだ！」

そう、改めて、覚悟が出来たような気がした。

数年が過ぎた、ある日、街の中を歩いていて、なにげなく、ある画廊に入り、飾られている絵を観て、久美子は衝撃を受けた！

あまりにも、春馬の描く世界を思い出させる絵に出会ってしまった。

久美子は、身じろぎも出来ないほど、魅せられていた！長い時間、その絵から離れる事が出来なかった！

そして、その絵の展示会が終わる日まで、毎日その画廊に通って、何度でも、観ていたかった、観飽きる事は無かった！

最終日に画廊を訪ねると、もう何人かの他の画家は絵を取り外していた。

そして、久美子が、衝撃を受けた絵を取り外しに来ていたのは、美しい青年だった、おそらく、後ろで、声をかけて、指示しているふたりの男女が、あの青年の両親なのだろう、久美子はその姿を、仕草を、気づかれぬように、静かに、いつまでも、作業が終わるまで、見ていた。

そして、あの絵を大切に抱えながら、久美子のすぐそばを通り過ぎて行った！

その時に、一瞬、見えた、左の耳のうしろに、かすかに見えた、ほくろの形を、久美子は見落とす事が出来なかった！

あの、狂おしいほど、愛し合った、「春馬」の耳の後ろの同じところに、確かに、同じ色の綺麗な小さなほくろがあった事を、今も、久美子は、忘れる事が出来ないでいた、けれど、久美子は直ぐに気持ちを切り替えた。

あの子が生れて、顔も見ることも出来ず、この胸に抱きしめてあげることも出来ず、産湯さえもつからぬままに、ひとに託したあの子の幸せを願いながら・・・

全てが、禁断の恋の残酷さを隠して、誕生した、いとし子への気使いだったはず！もう、これ以上近づいてはいけない事だった！

私は、あの時から、本当に、人格が変わってしまったと、思うのです！たぶん、昔の私は、こんなふうに、孤独に耐えて生きる事は出来なかったと思うのです。

まだ、幼さの残るあの頃、心のままに、情熱に任せて、禁断の愛に溺れてしまった事が、久美子の性格のすべてを入れ替えてしまったのだろうか・・・

姉ふたりとは歳も離れていたし、甘えっこで育ってしまった私は、母が亡くなってから、寂しさに耐えられず、偶然にも、心情の似た境遇の春馬に引き寄せられるように、心を許した春馬は血のつながった伯父だった！

けれど、久美子には、全く、伯父としての感情では無かった！

ある日、父が連れてきて、その日から、一緒に生活したけれど、久美子には、伯父だという親しみの感覚が無く、はじめから、不思議なほど、お互いが打ち解けられて、心を許せる人間として、久美子は好ましさを感じ取っていた。

むしろ、男性としての魅力に初めから久美子は、自分では気づかぬうちに、引き寄せられてしまったのだろうか。

子づれの歳の離れた大人の男に、なぜか、久美子は、心を許してしまったのだ！春馬も又、同じ気持ちだった！

久美子は姪なのだと言いつつ聞いても、感情が一人歩きして、男としての細胞が動き出す。どうしようもなく惹かれて行く、ふたりだった！

感情のコントロールが聞かなくなってしまう、男と女になってしまう苦しみを共に感じていた。

久美子を女としてみてしまう自分が、ひどく、卑しさとあさましきで、苦しくなる。

絵を描く事も、同じように、感情が同化して行くふたりの見えない糸で巻きつけられるような感覚だった！あの頃から、すでに、三十数年の歳月が過ぎていた。

久美子を取り巻く環境も、劇的に変わってしまった。

「突然の春馬との別れ！」

「人知れず、生み！」

「他人へ託すしかなかった、わが子の存在！」

「消しようの無い、罪意識に、悩む日々！」

「そして、父の死！」

「春馬の息子、匠との、偽りのやすらぎの暮らし！」

「そして、匠の告白と別れ！」

そのどれもが、久美子を、追い詰めて行き、孤独が増して行った。

(二十)

久美子は仕事もまた、流れに身を任せた生き方であっても、勤め先が商社という事もあり、男女雇用均等法に伴い久美子自身がさほど望まなかったけれど、気まぐれに受けた営業職に受かって、男性社員と共に働く中で、出張や海外への転勤もあった。

久美子の転勤先は主にアジア圏だった。

それほど長い期間ではなかったが、もろ手を挙げて、喜べる良い思い出はない。

時には一人歩きの出来ないほど、怖い思いをした経験もあった。

だが依然として、男性社員の意識は、ほとんど変わってはいなかった。

男優位主義の意識の中で、久美子は手ひどい扱いを何度も受けた、時には出張での宿で、セクハラ的扱いをされる事もあり、やりきれない思いと又、久美子の精神の中で、退廃的部分があった事は久美子自身も反省すべき点だった。

だが、「どうにでもなれ！」という気持ちになったことも事実あった。

久美子の人格の中で、どうにもならない感情があった。

傲慢さと退廃的な、侮蔑する思いに悩む！

だが、そのもう一方の意識は凜とした久美子がいて、いつの時も、淫らで、退廃的な精神を払拭した人間としての振る舞いが出来ていた。

時には侮辱的な扱いを受けても、抗議する事さえ、面倒に思えて来る、無意志の作用が久美子の中で勝手に作用していた。

久美子はそんな危険な誘惑の多い、虚無的な中で生きていた。

久美子は、男社会がまかり通る、名ばかりの、男女雇用均等法であっても、悲観的な考えはあまり持たなかった。

久美子は自分が心から望んだわけではなかったけれど、あの時代の先端を生きて行く事の見せかけの優越感が久美子の見栄っ張りな気持ちを満足させていたのかも知れない！

だが、現実の仕事は、たやすい事ではなかった！

けれど、久美子のその時まで見えていなかった、潜在能力を久美子自身が引き出して、厳しい中でも、営業職をこなして行った。

戦後のアメリカ的価値感を無理やりに押し付けられていた時代だった。

うわべだけの、きらびやかさで、華やかな面しか、見ようとせず、見えてはいなかったのかも知れない・・・

久美子は、一方では、キャリアウーマンとしての仕事の頑張り、眼に見えた輝きがあった。

だが、一方では、満たされぬ肉体の悩みを持ち、女としての苦しみをあがく恥部も持ち合わせていた。

「満たされぬ愛を求める女になる恥部！」

それは、春馬によって刻まれた、

「あの幻の想いがうずく・・・」

その事が、久美子を生涯苦しめる現実があった！

清純な想いと歪んで膨らむ幻影がなおいっそう、久美子を狂わせてしまう春馬への愛、孤独に過ごす、胸の寒さがやるせなくて、人を恋しがらせる時間が身もだえする。

久美子はふと自分を取り戻した時、そんな自分を、際限なく軽蔑し侮蔑して、吐き気がする。

そんな事を何度夢の中で見たことだろうか・・・

確かに、久美子はひとりで暮した長い時間を、純粋な想いで、春馬以外の男性を愛した事も何度かあったが、いつも最後の一步へ、踏み込む事が出来なかった、遠い過去に囚われた意識がうずきでして、なにもかもが虚しくなる。

久美子に刻まれた記憶の中でよみがえる鮮やかな愛を！

若く、純粋な心と愛が、久美子はその頃にとどまったままでいた、そのあざやかさは、比べようの無い、久美子の純粋で、絶対的な愛の記憶だった！

その記憶の中で、揺れ動く、春馬から贈られたあの絵！

『春の幻影』

絵の中で、久美子の姿が揺れるのだった。

春馬の魂が久美子を呼んでいるように・・・

やはり、久美子には、消す事の出来な記憶だった。

何かに懇願する私と

清貧な暮らしを懐かしむ私と

隠し切れない情愛に溺れる私と

いくつもの顔に刃を向ける

異国の地で見た毒花の

おどろおどろしき姿

(二十一)

久美子はいつ頃の事だったか、今となっては、三十代頃の事だったか、四十代だったかさえも定かでは無い事だけれど、ひどく、体調の悪い時期があった。

世間で言うところの、いわゆる、うつ病だったのか、又更年期障害だったかも判断がつかない、精神が微妙で、不安定で、混乱して、辛い状態だった。

はじめは春馬への想いがまだ、絶ち切れなくて、体調が悪いのだとばかり思って、耐え忍んでいた。

けれど、気づくと、わけもなく、死を選びたくなり、時には、死に場所を求めて、旅に出たこともあった。

けれど死ぬ事は、とてもエネルギーと勇気のいる事なのだと辛うじて気がつき、ふと、まともな自分を取り戻して、家に帰った。ほんの短い期間だったと、思えるが、医師に相談して、薬を出して貰った事もある、たぶん、二年近く呑んだとおぼえている。

症状はいろいろと複雑に現われて、久美子を苦しめた。

仕事にも、多少だったが、支障をきたす事もあったが、久美子は、誰にも気づかれないように、何とか、乗り越えていた。

ひどいめまい、食べ物の味がわからない、ひどい不眠症、他人との会話が出来ない怖さ、血圧の急な上下する不安定さ、言葉をわすれる（思い出せない苦しさ）、何もかも自信がなく絶望感だけが際限なく広がって行く恐怖、そんな、いろいろの症状が、気絶しそうなまでに、何処までも、深い谷に引きずり込まれてしまうように、気分の悪さで苦しめていたが、こんな症状も、毎日同じではない事で、何とか、乗り越えられた。

不思議だけれど、久美子の意識の中で、仕事や他の人と接している間は、気力で平常心を保っていられた。

だから、周りの人には、体調が悪いのだと分かる程度で精神の異常さには気づかれずにすんだ。

時には、体調が良く、気分がとても良い時は、どんな夢も目標も、何かも、叶えられる、希望に満ち溢れた感情が嬉しくて、目標を持ち、夢を持つが、それが直ぐに絶望に変わってしまう、心と精神が変化してしまう事が、耐えられなかった。

そんな症状も、ある、衝撃的な体験がきっかけで、私は驚くほど、これらの症状から解放された。

その出来事は、世間では、ごくふつうにある事で、何の不思議ではないのかも知れない！

「偶然の出来事だと人は言いますが！」

「私にとっては、奇跡だとも、思えることでした！」

人生は、不思議なほど、いろんな運命に出会い！
人間の生きる力は、際限のない自然の力！

自浄能力を持つエネルギーを存在している！
久美子はそう信じて生きている。

幾多の淡い想いを抱いたことも確かにあった。

春馬と匠とそして、わが子と、三度の、それぞれの別れは辛くて、悲しい、耐え難い体験だ、久美子の心の奥にぬぐいきれない傷として刻まれてしまったようだ！

久美子自身、純粋な気持ちでの男性との出会いの場面が確かに、何度かあった、けれど、その度に、こんな事は、私には似合うはずも無い、恥ずかしい事なのかも知れない、そう決め付けてしまう、そんな久美子の愛のとらえ方は、どこか、いびつで、ねじ曲がってしまった。

「心を持つ人間として成長した。」

人間としてのあまりに未熟な時期に体験した愛は、それほどの素直さをなくした、大人としての道を踏み外して、どこか異質な見方で感じる「愛」と「美」の魅力に取り込まれた、そんな久美子の大人の世界を歩いて、ひとりの人間として生きてきた。

久美子は不安な気持ちが全身を包み込んでしまう孤独がつねにつきまとう、危うい日々を生きてきたのかもしれない。

「ながい、ながい、ひとりだけの生活！」

時には自分が生きてきた事、すべてをうち消したいと思ってしまうほど、

「激しい恥ずかしさで心が乱れて苦しかった！」

久美子を知る人の誰もいないところへ、逃げて行きたい衝動に駆られるが、その半面、仕事が久美子を喜びに変えてくれる事も多くあった。

四十年近い仕事のキャリアは苦しみも多く、また、喜びもある、今、歳若い部下に囲まれての日々は、久美子に仕事への自信を与えてくれる時、女である事を忘れて仕事の成功に酔いながら、理想的な人間でいられる時も多い、そんな、なにげない幸福感は、久美子の生きて来た、ご褒美なのだろうか！

あまりにも、使い古された、言葉だけれど！

「若いという事はやはり素晴らしい事だ！」

大きな仕事の成功を祝って、部下をつれての飲み会での席で、遠慮の無い、ある若い部下に聞かれてしまった。

「忘れられない恋愛をした事がありますか？」

「しばらくの間、久美子の耳から離れない言葉だった。

生きて行くことに辛いほどの失恋をしたことは？」

その青年は、いきなり、言った。

おそらく、青年は辛い恋愛に苦しんでいて、いつも頭から離れずにいた時だったのだろう。

(二十二)

ある日、突然、春馬の息子、匠が尋ねてきた、匠は、久美子に、強引なまでの一方的に愛の告白をして、久美子はその事を受入れないと、悟った時、突然、家を出て行った！

あの日から、もうとても長い時間が過ぎて行った。

あれ以来、一度も「匠」も「久美子」も、互いを訪ねる事はなかった。
もちろん、連絡を取り合う事も無かったのだが・・・

今、その「匠」の突然の訪問は、久美子が想像もしていなかった！
非常に驚き、混乱をきたす事で、久美子を訪ねてきたのだった。

春馬と久美子の別れの日から、もう、四十数年の時間が過ぎていた。
けれど今も、久美子は、春馬の行方さえ知らない！知らせてもくれない！
その春馬が今、病に苦しんでいて、残された時間！
「わずかな命！」

なのだが、春馬は誰ひとり、受入れようとせず、ひとりで苦しみにのたうちながらも、耐えているのだと！
悲しみをこらえながら、匠は、久美子に伝えた。

匠は、結婚して、子供もふたり生まれて、静かな人生を送っていて、今の匠は五十代をむかえた、立派な紳士の貫禄、気品ある姿だ、社会的にも、認められていた。
勤めている会社でも、ある程度の地位で活躍していることは、久美子にも伝わり聞こえて来ていた。

もちろん、今日、久美子を訪ねて来た事は、春馬の息子としての心遣いからであった。
匠は、息子として、春馬の介護を申し出ても、会うことすら、強く、拒み続けているほど、世を捨てた生き方を貫こうとしていた。

最後の手段として、久美子の春馬への想いにすぎる事しかないと考えたようだ。
久美子は長い歳月を、春馬の幻影に取り付かれているような想いに悩み、苦しんだ日々が！
思い出があふれて来る、つきない想いは切ないほど胸をあつくした。

長い年月は、断ち切れぬ想いと、生身の久美子は杓子定期的な生き方を求めながらも、時には、現実の誘惑に感情を乱させて、思いもよらぬ行動をしてしまう。

そんな久美子自身の欲望と反省の繰り返しだったように矛盾した思いの生きた日々だった。

どうする事も出来ない想いが、体中をかきむしるほど、今も苦しい時もある。

けれど、時間を重ね、年齢を重ねていく日々、経験の中で少しずつ、落ち着きと耐え忍ぶ、賢さを、時がおしえてくれた。

今、匠が話し、頼みとする。

「冷静な久美子への願い！」

春馬は今現在もまだ、壮絶に生きている事を伝えてくれた事を、心の中で何度も繰り返し、久美子自身にいい聞かせてみた。

久美子の春馬へ想いは今も変わらない愛を重ね合わせて行く、そんな心情だった。

やはり、時間とは、最大の味方！

人は、どんな苦しみにも、耐えられる力を与えられているのだと、久美子は悟った。

「ただひたすらに生きて愛した日々・・・」

若くて情熱がたぎるような、

「春馬への想い！」

逢えぬ日々の中で、季節ごとに泣き、恨み、恋しがった

この体のうずきが恨めしさと、恥ずかしさがない交ぜになる、混乱した想い！

ふと、意識的に、心だけが浮遊する別の世界を旅して、他の人から聞きかじった、極ふつうの恋愛をして、極ふつうに結ばれる結婚を夢みた日も確かにあった！

久美子は、今、このごに至っても、春馬との愛に生きた四十数年を夢物語のように、混乱して、久美子自身が戸惑いと魔性の求めを見ていた。

現実の春馬の病状は深刻な問題で、久美子の心は蒼ざめた、光景に打ちのめされる。

あの山里の寺、その奥の滝にうたれる、威厳ある姿は、果たして、久美子を受入れてくれるのだろうか！

現世を拒否して、この世のすべての痛みをわが身に引き受けて、仏さまに、より近づきたい春馬の願い！

今の久美子とのあまりにも遠い距離を考えずにはいられない。

春馬の着る、見えない鎧姿は、今もたくましい騎士の姿のように、美しさと官能の共存する春馬として、久美子には感じてしまうのだろうか、残酷なまでに！

けだるい目覚め

明け切れぬ春の目覚めに
重い体が少しだけうずき
若さにたぎる怖さで心が震えた
不安だけが広がる
もう誰も私を忘れてしまった
私が選んだ自由な生き方
その後が続く孤独
心さえも体さえも
覆いつくす悲しみも
逃れる事の出来ない
危険な私の選択

(二十三)

匠が、久美子におしえてくれた、春馬の住む、山寺へ向かった！

久美子は、何も考えらずに、心が乱れて、不吉な予感、胸騒ぎがして、いつときも、じっとして
いられない思いで急いで、新幹線に飛び乗った。

以前に、ただ、春馬にすぎりたくて、訪ね歩いた時とはやはり長い時間がすぎている。

「文明の発達とは、これほどありがたい事なのだ！」

何より、久美子は交通機関に違いを感じながら、少しでも早く、春馬に逢いたいと、列車の中
でも、落ち着いて座ってられない気持ちだった。

春馬のいるお寺、そこは、東北のある寒村、山里にある、荒果てた寺、村人もあまり寄り付かな
いほどの寂しい場所だった！、わずかな村の住民が、肩を寄せ合って暮している。

とても静かで、老人の多い村、歩いてる人にも中々出会えない、寂しい、山深い村の、又その
奥に、春馬の住む「庵」があった。

村人と春馬にどんな気まずさがあったのか？

案内を頼んだ村人も、関わりあいになりたくない！

「さもいやだ～な～、めんどうな事だ！」

という顔をして、色よい返事を中々してくれなかった。

何度もお願いして、やっと仕方なしに、久美子を案内くれる人を見つけた。

せつかく、遠くから、来たのだから、

「仕方ね～んべ～な～」

といいながら、お寺に案内してくれた。

それでも、このご老人は、久美子に、お世辞でも言うように、春馬の事を話し出した。

「そんだ～、ね～、あの坊さんは、昔はいい人だった～」

「何度もこん村の人の難儀を助けてくれたんだと！」

「あん頃は元気で、動き回ってで～、丈夫だった～」

「ちょっとした、医学知識があるだ～とかで～」

「山の事故で大怪我した人の血止めをしてくれたり！」

「困ってる人をよ～け、助けてたあ～で～」

「あん～人は、薬草の事を、よ～け～知ってたあ～」

「村の人が困っていると、分けてくれたもんだあ～」

「大酒のみで、困り者だった奴を、改心させた！」

そんな話を、ぽつり、ぽつり、して久美子に聞かせてくれた。

久美子は、ただ、嬉しかった。

たとえ、どんな小さな事でも、春馬のそうした姿を想い描いて、みえているようで！

「春馬の壮絶な生きざまを見聞きしているようで！」

そして、村人のこまり事や世話が出来た、春馬の健康的な姿を思い描きながら、久美子はすこしほっとした気持ちになれて嬉しかった。

それと同時に、もし、春馬が逢ってくれたとしても、これから、久美子はどうすればよいのか、何が出来るとか、見当もつかなかった。

ふたりが、別れた日から、あまりにも長い時間が過ぎてしまった。

「もう、あの若く、燃えるような情熱はない！」

久美子は、ただの年老いた、醜い女になってしまった。

久美子の思い描く、春馬は、若く、たくましくて！

「凜とした、立派な、男としか、思い出せなかった！」

力強く、久美子を抱きしめてくれて、喜びを与えてくれた姿しか、久美子には見えていなかった。

草深い、荒れ果てた、山寺の片すみに、春馬の住む「庵」が、そこにあった。

案内の老人は、落ち着かないようすで

「あ～ん～なかで寝てるだ～で～」

そう言って、指さして、身をぐるりと方向転換して、いそぎ足で去って行ってしまった。

なにが、そこまで、この村の人たちに春馬は嫌われる存在になってしまったのか？

久美子は少し気がかりだった、けれど、今、やっと、春馬のいる、この眼の前に立っている、ただ、そう思うだけで、それだけで、緊張して、体が硬直してしまいそうだった。

それは、「庵」とは名ばかりの、あまりにも粗末な、掘っ立て小屋だった。

荒れ寺の片すみに、手作りの庵は、小板のはし切れや廃材を集めて、つなぎ合わせて造った建物だった。

隙間だらけで、やっと、雨露がしのげる程度の狭い建物だった。

だが、この粗末な建物には不釣合いの立派な、手作りの表札がかけられている！

今の春馬のいる住まい！

『幻想庵』

春馬らしいと久美子は思った。

「ふ〜う〜と、深く、深呼吸して！」

なんども、なんども、繰り返しても、息苦しくて、緊張した気持ちを落ち着かせた。

久美子は、そーっと戸をあけてみた！

そこには、五畳ほどの広さに、小さな囲炉裏があり、痛んだ畳が三枚ほど敷かれた上に、薄い布団にくるまって、横たわっていた。

身動きひとつ出来ないほど、やせ細った姿の春馬がそこに寝ていた。、

「伸び放題の頭は白髪！」

「ひげが伸び放題の老人の姿！」

けれど、久美子は、どんなに風貌が変わっていても、直ぐに春馬だと気づいた。

春馬に声をかけたい、そう思っても声が、言葉が、久美子のからだのどこかで固定されてしまったように、出てこない、息苦しさがもどかしい！

何か、話しかけようとしても、胸に込み上げて来る、感情が定まらず、混乱した想いになってしまう！

春馬の姿を見ているだけで言葉にならない！

久美子の中で時間と混乱と思考が攻めぎあっていた。

もどかしさと焦り、久美子の体は動かないけれど！

「心は春馬にすがり泣いていた」

息が詰まるような、懐かしさと、切ない想い、苦しみと

共に、心が動揺して、取り乱してしまいそうな感情に、なってしまうのをなんとか耐えていた。

「こんなにも変わり果てた老人の姿なってしまった！」

長い時間が過ぎた事を久美子に認めさせた。

春馬の寝姿をみつめながら、久美子は、やっとの思いで、春馬に近づいた！

静かに、物音をたてず、そばによって行き、

『久美子です！』

『久美子です！』

ただ、そう伝えて、しばらくは、黙ったまま、次の言葉がつづかなかった。
けれど、その時、春馬の体が少し動いたように見えた。

「震えて、嗚咽している！」

そう、久美子には見えた。

しばらくの、沈黙が、この狭い空間の重い空気の流れのすべてを止めてしまった！

そんな、重苦しさが、久美子を緊張させた。

ただ、呼吸が出来ないほど、息苦しい！

けれど、それは、決して、この場を逃げ出したいと、思うような気持ちではなく！

むしろ、今、春馬のそばにいるのだという感情の乱れからおきている事!!!

(二十四)

久美子は、伝えたい言葉がたくさんあったはずなのに、何も言葉が浮かばない、言葉にならない、想いがあふれ出て来る事が切なかった。

懐かしさと、辛さと、悔しさの入り混じった焦りと混乱した気持ちだった。

春馬はやっと静かに目を開けて、久美子の姿を見て、

「ひとすじの涙が流れていた！」

その涙を久美子に悟られぬようにする動きが辛そうに、久美子には見えて、なお悲しく感じた。

春馬の体がこれほど悪くなっているのだと、思うと、たまらなく、辛い想いになる。

ここで、久美子は春馬に何をしてあげられるのか？何も思いつかぬまま、時間だけが過ぎて行った。

久美子はもう、春馬からぜったいに離れないと決心した。

けれど、春馬は重い口を開けて、

「すぐに、帰ってくれ！」

「たのむから、かえってくれ！」

そう、言っている姿が、とても苦しそうだ！

久美子は、これからの時間、すべて、春馬に尽そうと、たとえ、どんなに春馬が、追い返そうとしても、私はここにいる、そう、つよく決心した！

久美子は絶対に、春馬から離れないと即座に決めた！

久美子の独断できめて、急いで、電話をして、医師を頼もうとした時、春馬の動かせない、弱りきった体で、必死になり、久美子に覆いかぶさるように体ごと、医師を呼ぶ事に抵抗した。

「渾身の力を久美子に向けて！」

「その姿は、すさまじい気迫に充ちていた！」

なぜ、そこまで、世捨て人になったかは、久美子にわかる気がした。

すべてが、ふたりの愛を貫くには、たぶん、このような生き方しか選ぶ事が出来なかったのかもしれない！

「愛を貫く事は！」

「ふたりが共に暮す事ではなく！」

『お互いを尊重する心を忘れない事！』

なのだと、久美子は、その時、はっきりと分かった。

春馬と久美子は愛を確かめ合う、男と女のかたちで現す愛情ではなく、

『心で互いを想いやる事！』

『密かに互いの胸の中で想いやる事！』

『男でも女でもなく、人間として慈しみあえる事！』

久美子は、春馬の生きてきた歳月を思いながら！

久美子との肉欲には溺れない関係を守れなかった事が、お互いの中でふかい罪を意識した。

その後の人生は懺悔し、罪を償う事では、生きられなかった伯父である

『春馬』

もっと、深い罪を犯した久美子は、今、真実の生き方を春馬から、おしえられたように感じた、
今、なにをすべきなのか！

「春馬の最後の日々を！」

「伯父と姪としての関係に戻り」

本当の肉親の情愛で、伯父として共に暮して！

「春馬が別の世界へ旅立つ時！」

「心に重荷を残さぬように！」

どんな些細な事であっても、久美子は手助けをしてあげたいと思う。

ただ、そばにいて、春馬が安らかに眠れるように、ただそれだけ、春馬を見送る事、久美子の今なすべき事で！

「願いなのだ」と心に決めた！」

あまりにも、春馬の人生は孤独過ぎる！

春馬はもう充分すぎるほど、苦しみを、辛さを、身をもってあがない、罪無き罪を、体に刻みながら生きて来たはず！

もう、誰はばかることなく、春馬と久美子は、伯父と姪になって、取り戻す事の出来ない、肉親として、家族としての時間を大切にできる機会を与えられたのだと、久美子は、思った。

久美子は、勤めている会社へ電話を入れた。長期休暇を願い出て、ここで暮す事にした。

もう、起き上がる事さえ出来ないほど、衰弱している春馬に付き添い、介護する生活を選んだ！

幸い、久美子は、定年をまじかに控えて、部下の幾人かは、久美子の代わりに勤められる人物が育っていた。

だから、多少の混乱は起きるだろうが、それとて、解決出来る事だと、久美子は思った。

なすべき連絡を済ませて、久美子は、その日から、春馬のそばに常についていたが、春馬は、時折、激しい痛みで襲われるが、枕元にある、春馬自身が採り貯めた薬草を煎じた物を呑みながら痛みに、耐えている。

その姿は、言葉に尽しがたい、壮絶な苦しみだった！

久美子が春馬の体に触れようとしても、跳ね返されるように、すぎましい春馬のあがき、苦しむ姿！

しばらくすると、痛みが治まり、疲れて眠りにつく、その繰り返りで、完全に、春馬と久美子のふたりだけの世界が、夜となく、昼となく、境めの無い長い戦いの時間が過ぎて行った。

数日、久美子は、春馬の苦しみをただ、見ているだけで、なにも手助けする事も出来ずにいて、やがて、春馬は、長い苦痛から、解放されたように、意識がなくなり眠ったまま、少しずつ、少しずつ、久美子に伝わり来る、春馬の魂の輝きは、消え行くように！

意識を無くしてから、五日目の夜に、春馬は息を引き取った。

最後の数日、久美子の考えで、町の医師に来てもらったが、何も、治療の出来る状態ではないと言い渡された。

春馬の体は、全身にがん細胞が広がっていて、手の施しようがないと医師に言い渡された。

だが、久美子の強い願いで、電話連絡したときには、来てくれる約束をしてくれたが、ただ、春馬を見守るだけの診療だった。

春馬は、自分がどんな病気に犯されているかを、最初から知っていた。

でも、町の医師に自分の病気の治療を受けようとは、考えず、一度も、医師の診察を受けてはいなかった。

春馬自身の治療方法を用いて、いままで、この庵で自然治癒力をたよりに、山で多くの薬草を採り、試していたようだった。

けれど、町の医師の話では、春馬はもう手の施しようがない病状である事を、久美子に説明して、医師としての診断を伝えた。

医師として、今の出来る事は、春馬の生死を見届けるだけしかなかった。

それでも、春馬の壮絶な病気との戦いを、医師として、驚きと敬意を持って、最後を見守ってくれた。

久美子が春馬のそばにいられたのは、わずか十数日ほどで、春馬は息を引き取った。

『七十七歳の壮絶な人生の終りだった！』

久美子は、迷い苦しみなながらも、ふたりの愛の証しである、わが子の存在を、春馬には伝えなかった、もうこれ以上、

『春馬を苦しめたくなかった！』

せめて、別の世界では、何も苦悩する事なく、大好きな絵を自由に描き、この世では成し得る事

が出来なかった春馬の芸術家としての才能を充分に開花させて、おおらかに過ごしてほしいと、久美子は祈り、願った。

いつか、別の世界で、出逢った時に、春馬はどんな顔をして、私を叱られるだろうか！

それとも、喜びの抱擁をしてくれるだろうか！

そんな春馬への思いを残したまま！

久美子は、春馬を別の世界に見送り！

春馬の壮絶に生きた場所、『幻想庵』を離れた。

草深き粗末な庵に住み樹木と語らい
月のひかりに映る美しき露草を愛でる
貴方の残り香に酔いて
切なく去りゆく愛しき場所
壮絶な痛みに耐えた孤独は何を語り
私に見える世界を照らし続けて

(二十五)

春馬が旅立って、しばらくの間、久美子は、現実の出来事だと思えないまま、何をする気にもなれず、ただ、呆然とした日々を送っていた。

久美子の心は、今も、あの春馬が壮絶な痛みと戦って、顔をゆがめている姿を、久美子は浅い眠りの中でひとり、息を潜めて、春馬を看ていた。

やがて、仕事に復帰しても、何もかもが、久美子の意志や感覚が合わなくなってしまった、なぜか、久美子はすべてのことに違和感を覚えた！

「その時、仕事は、もう充分にしたと思った！」

「ここでは、私がやるべき事が何もないとも感じた！」

「会社への私の貢献出来る事がないと感じた！」

定年まで、あと一年を残して、退職する事を久美子は即座に決めた。

何の迷いもなく、さばさばとして気持ちだった。

世間的には、愚かな事で、友人や知人は勿体ないというけれど、久美子は、仕事への気力がなくなってしまうと、仕事に対しての虚しさだけが、存在した。

誰もが疑問に思ったかもしれないが、確かに、友人の嘆く気持ちも理解出来た！

これからの久美子を支えて行く

「生活の資金をどうするつもり？」

「退職金の額が大きく変わって行く事も事実だ！」

誰もがそう言って、会社にとどまる事をすすめてくれたが、久美子には、迷いが無かった。

なぜ、そう、考えたかは、分からないが、久美子は仕事以外で、なすべき事があるような気がしていた。

とても、落ち着かない、焦る気持ちがした。

何より、お金には執着心がない、もう、あまり使う事もないと、思える、時々、体が酷く疲れを感じている事も事実あった。

「背中に鈍い痛みがつづいている！」

久美子は、この痛みに気づいてから、長い年げつがたっていた。

けれど、仕事や他の事で、久美子自身の体の事は後回しにして来た。

この症状に気づいてからも、久美子自身はそれほど不安は感じていなかった。

ところが今は、とても何かに怯えるような不安を感じて、からだを休めたい気持ちがある事は、春馬を見送って、久美子自身が気が弱い人間になってしまったのかしら？

ふと、そんな思いに、ひとりで苦笑していた。

思えば、私はいつでも満たされない想いと、ぎこちない感情に怯えていたような気がする。
その答えが、何かを知っていながら、答えを捜す人生だったのか！
もう、追い求める答えさえもない事が悲しかった！

春馬から贈られた絵

『春の幻影』

この絵を飽きることなく、何度も眺めていて、久美子は絵の世界に吸い込まれてしまいそうな感覚になる。

それは、春馬の魂の呼びかけだと気づいた時、春馬へのとめようのない愛しさが久美子を包み込んだ、春馬から、久美子へのメッセージなのだろうか？

この絵を受け取った時から気になっていた、絵の中に一箇所ある、不自然な空白の意味に気づいた時！

春馬からのメッセージの意味を知った時！

久美子は、全身に鳥肌がたつ思いがして、身を硬くした。

「その空白を埋めるのがこれからの私の生きる道！」

その事の大切な意味を知った。

『春馬と久美子の愛の成就！』

春馬への愛を描く！

久美子が、もう一度、絵を描く事を春馬は願っている！

『春馬の想いなのだと感じとった！』

これからの久美子の人生を生きる意味！

『人の世で叶う事の無いふたりの愛の世界を描く！』

『春馬と久美子の愛の世界は絵の中で生きる事！』

あの壮絶な生き方で、春馬は久美子に伝えていたのだと久美子は悟った。

それは、誰かに師事をうける事ではなく、久美子の心を描く事！

たとえ、世の中の常識に合わなくても、それは、永遠に変わらぬ愛を描く！

そして久美子は春馬から贈られた絵「春の幻影」の中の

「春の花園」に、久美子の象徴である、リンドウの花を描いた！

心にあふれる感性を信じて、久美子は渾身の想いをこめて、描いた！

「春の花園の中に、密かに咲くりんどうの花！」

それは異質なようでいて、あまりにも、清楚で自然な美しさが匂うごとく、花園を染めていた。そして、絵が仕上がったあと、その絵を、久美子は、知り合いの画廊へ託した。

久美子もまた、春馬と同じように、体がガンに犯されていたのだった。

急性のスキルス性胃がんで、末期だった。

その事を知っても、久美子は少しも、驚いたり、悲しんだり、怖いという感情は不思議となかった。

けれど、久美子に、別の不安があった。

いつの頃だったか、友人たちとつまらない噂ばなしの中に、久美子はふと、気を留めた、友人の誰かが、話していた事を今、とても不安な心情になっていた。

この事は、不確かな事だけれど決して、疎かにしておけない久美子の不安の原因だった。

「人は、最後の瞬間、命が尽きようとする時！」

「胸の奥に閉じ込めている秘密や、真実！」

誰にも言えず、心の中に閉じ込めている秘密が重く苦しくて、最後の時にそばにいる人に話してしまうと言う。

「秘密を打ちあけてしまうのだとか！」

最後の、最後に、そばにいてくれる人に久美子は話してしまうのではないかと、不安で心配だった。

『誰にも知られてはいけない！』

『あの子の存在！』

あの子の幸福だけを願って、久美子は自分の存在を知られずに静かに消えたかった。

もし、久美子が天国へ行けるとしたら、私は、春馬だけに打ち明ける、

「ふたりの愛の真実を！」

だから、私の命の終りは、

「誰もいない場所で、ひとりで！」

たとえ、どんなに寂しい旅立ちであっても、守らねばならぬ事だと、久美子はかたく決心している！

その準備だけはしておかなくてはと思っても！

そう思う一方で、突然、何かが、違ふと心に囁く声が聴こえる！

「囁く声は私に何を伝えようとしているのか！」

残された時間を、どう生きれば良いのだろうか！

(二十六)

今、久美子自身の命がどうなるかよりも、病気の体の事よりも、秘密として、隠し通した、『わが子の存在！』

春馬と久美子は、ただ、あの子に命を与えただけの存在
だけれど！

「自分たちの命より大切な存在だと思う！」

いつの日か、春馬に出逢えた時、伝える大切な事！

久美子の考えを、春馬もきっと尊重してくれる、そう思う事で、すべての苦しみに耐えられた。

「あの美しく、凜とした青年に成長した姿！」

「言葉も交わせず、密かにかいま見たわが子！」

「春馬に生き写しのような姿の青年！」

どんな心を持って、絵を描き、あの素晴らしい感性を育てたのだろうか？

命を与えた者として、なにひとつ、伝える事も出来ない、たとえ、名乗れずとも、あの子の成長を見届ける事さえも叶わない事！

けれど、幸せを祈る事だけが久美子に許されたこと。

ただひとつの祈りが、今日まで苦しみながらも久美子は生きて来る事が出来た。

だからこそ、久美子は、最後の時はひとりで、自分を知る人の誰もいない場所を選らぶ事を決めていた。

心静かに

おわりの日を迎えて

悔いのない日々感謝

愛の記憶は美しく

愛し子の気高き姿見て

懺悔する想いと

歓喜する想いと

幸多かれと祈り密かに

春馬を見送り、仕事もやめて、新たなる生きる道を進む久美子に無常なほど、運命は厳しくて、まるで、救いようのない急な坂道を転げ落ちて行く！

久美子のまわりにいる人たちは、誰もが、この不幸続きを気の毒に思いながらも、わが身におきた不幸ではない事に、ふと、救われる思いになる。

久美子の体は、もう、これといって治療の方法がない！

手術はおろか、その他の抗がん剤も久美子は拒否して、痛みだけを抑える事を、医師にお願いして、入院はしないで、自宅で描きたい絵を描いたりして、過ごしていたがやはり、激しい痛みに襲われる事も多くなって来た。

だが、まだ、久美子は寝たきりの病人ではられない、そんな気持ちがつよかった。
この体を動かせるうちは何処へでも、私は行きたい！

私の心は自由に羽ばたく
命つきるその時まで与えられた時間を
この美しい世界に私を染め抜いて

たとえ見えない絵の中にある景色だとして綺麗すぎるさまざまな木々に私はいる！
久美子は、ふと、子供の頃の事を思い出していた、幼かった日に、母が入院している町へ、母に会いたくて、夢中で歩いた、野や山々が、今、なぜか、浮かんで来た！

母につながる、大切な思い出、あの光に満ちた、銀色に輝いていた、遥か遠い山々の連なり！
あの、幼くて、寂しくて、不安だった記憶！
あの日、母が恋しくて、会いたくて、不安と恐怖が入り混じった、小さな胸がはち切れそうに、苦しかった。

だけれど、あの美しい銀色の世界を見た時、子供ごころに、すべてに守られていると思えた！
ああ～あの銀色の山々をもう一度見たい！
そう、きっと、私を、別の世界に連れ出してくれる、大切な道しるべが、きっと、あるのだろうと思えた！

久美子は、詩人で、山登りの大好きなある友人に、久美子が、幼い日の体験をはなした。
あの幼い日に、入院していた母にあいたくて無我夢中で歩いて行った道の途中で観た、
「あの美しい風景！」

銀色に輝く山々は、私の生涯で忘れる事の出来ない思い出の風景の事を話して、何処の山なのかを、おしえて貰った。
あの白く銀色に輝き、幾つもの線が波打ち、まるで、虹を描くように、あの山々だけが特別な光で輝いていた山の名前は
『穂高連峰と言い！』
『今、初夏の美しい花々が咲き誇る！』
『天国のような場所！』

なのだと、おしえてくれた。

久美子は、どうしても観たいから、連れて行ってほしいと、頼んだけど、登山を多く体験している人が登れる山だから、たぶん、難しい事だろう！

『君には、とても無理な登山だろうと！』

簡単に言われて、久美子はとても落胆した。

(二十七)

しばらくして、友人から、連絡が来て、穂高に、どうしても登りたいなら、君を案内してくれる、ガイドさんを紹介するから、会ってみては、どうかと、すすめてくれた。

君の気が済むまで、よく相談してみてもはどうだろうかと言ってくれた。

「ただし、案内されて、登山できたとしても！」

「君の体力で、歩いて行ける場所までだよ！」

そう念押しをされての、紹介だった。

数日後、ある、カフェで、その、登山家と会った！

一目見て、すぐに、久美子はこのガイドさん、K氏を気にいった。

とても、人柄の良さそうな、頼れる人物に見えた。

お互いにひと通りの挨拶を交わして、まず、穂高へ向かえる日を聞いて来た。

K氏は、ひと通りの登山についての常識的な事を話して、久美子の今の健康状態を聞いた。

どうやら、友人は、ある程度の、私の病気の事を話してあるようだった！

そのあとに、久美子が案内をお願いしたい山である！

「穂高連峰の山について」

の説明をしてくれて、七月の末は、夏山の登山シーズンの一番良い時期で、何処の山小屋も混んでいますが、直ぐに、個室を予約しておきますから！

そう言ってから、もし天候が悪い時は、いさぎよく、取りやめにしてくださいね！

私も、この夏は、仕事が多くて、予定が詰っていて、本当に申し訳ないのですが、次ぎの予定が取れませんので諦めてください！

たぶん、穂高へ向かう予定日の天候は良いだろうと思いますが、昔は、「梅雨明け十日は、晴れる！」と言われていたものですが、どうも、最近の天候は、予測のつかない事が起きますので、「山や」泣かせですと笑いながら言った。

久美子は、そんなふうな言葉があるのだな～と関心しながら、K氏の話聞いていた。

K氏は必要な事を分かりやすく、丁寧な言葉づかいで、話し、穂高の山地図を見せてくれて、歩くコースを説明してくれた。

「ここ、上高地から、歩き出します！」

「そして、明神、徳沢、横尾と歩きます！」

普通は、一日で、涸沢まで入るのですが、もし、きつかったら、横尾の小屋に泊まりましょう。

次の日、少し朝早く歩き出して、涸沢までか、もし、まだ歩けるようでしたら、穂高岳山荘まで

、上がります。

「頑張りましょう！」

「頑張りましょう！」

そして、いよいよ、穂高岳の山頂を目指します。

僕の取れる予定は三日間ですがよろしいでしょうか！

そう言って、申し訳なさそうに、優しい笑顔を見せた、彼の予定された時間を、少しでも有効に使う為に、上高地へ、登山前日に、久美子ひとりで入って、彼に紹介された、上高地で一番お安い宿だといわれる「西糸屋」に泊まった。

K氏、彼は、前日の夕方まで、仕事が入っているために上高地で落ち合う事になり、上高地までは別行動だった。

彼は、少し照れながら言った。

「最近は何こう多い仕事なのですが！」

「中高年者向けの登山教室で話をするんです！」

「講演会で、私、講師なんです！」

そう言った、彼の笑顔が久美子には、とても気分の良いものだった。

なるほど、この人なら、人気があるだろうな〜と、久美子は思いながら、聞いていた。

「僕は、前日の仕事が済んだら、」

「そのまま、車で、上高地へ入ります！」

自家用車は上高地へ入れないので、沢渡で、バスに乗り換えていきますから、僕が、西糸屋へお向かいに行くまで、待っていて下さい。

たぶん、七時前には伺えると思います。

リックの中身は、

「食べやすい、ご自分の好きな物のおやつを少し」

「お水は五百もあれば？」

久美子は、お水が五百？て、なに？、何のことだか分からなかった！

ああ〜、ペットボトルの五百ミリリットルが一本と言う意味です。

「すみません、つい、言葉をはしよる癖が！」

「着替えは、ワンセット！」

山の中では一度だけ着替えが出来れば良いと思ってください。

それも、汗や雨に、濡れた時だけ着替えて、乾かして、又、それを着替えます。

彼は、なんの躊躇することなく、すらすらと言った。

「三日も、着の身、着のまま？」

久美子は、家に帰るまで、汚れた服で過ごすのだと、覚悟した。

ああ～それから、帰宅用の着替え、ワンセットを、別に持って来て下さい。

上高地のロッカーに預けておき、下山時に着替えて、さっぱりして、かえれますから～
とにかく、背負う荷物は、出来るだけ、軽くして、歩きましょう。

そんな事を、早口で、久美子に伝えた。

登山の前日、久美子は、K氏に紹介された西糸屋に泊まったが、ほとんど、眠れずに朝を迎えた。

彼は、七時を少し過ぎた頃、迎えに来てくれた、私に会うなり、にっこりと笑顔で、すみませんが、リックの中身を見せてくれますか～あ～

いきなり、思いもしなかって事を言われた久美子は、どぎまぎしながら、リックを渡すと、彼は、リックの中身を見て、次々と、

「これはいりません！」

「これはやめましょう！」

そういいながら、久美子が用意していた、荷物をわけて多すぎる食べ物や、重い果物は、自分のリックに入れて、久美子のリックは、雨具と少しの食べ物と水、そして貴重品だけになった。

取りやめた、持ち物と、下山用のワンセットの着替えを、手早く、久美子の荷物とK氏の荷物をひとまとめにして、ロッカーに預けて、軽く、体をねじったり、足の裏を延ばすような？運動をして、久美子は、彼のまねをして、体を動かした。

「さあ～、出発しましょう～」そう言って、歩き出した。

ゆっくり、のんびり、周りの景色が目に入ってくるくらいの余裕で、歩いてください！

そう言って、私を彼の前で歩かせたり、自分の後ろを歩かせたりして、木や草、花など、目に付いた物を良く説明してくれた、午後、二時前に、横尾に着いた。

久美子は、まだ、歩けますと言ったが、彼は、今日は横尾に泊まりましょうと言って、荷物を置いた。

夕方まで、ぼんやりと外を眺めたり、なにをやるでもなく、ゆっくりと過ごすふりをした。

この小屋はお風呂があるので、入れますよと、おしえてくれたが久美子は、そんな気持ちにはなれなかった。

部屋は、何人かと相部屋で、これから登る人、下山して来た人、さまざまだった。

久美子は、誰かが、話しかけてきたときだけ！

「はいとか、そうですとか、応えるだけだった！」

とても自分から、明るく話しかけるほど、余裕のない、緊張感で息苦しいほどだった。

あの銀色の世界へ
母の面影を求めて
美しき魂を求めて
ひとり置き去りにして
何処に居るのですか
きっと私を受け止めて
美しい花園で会えるのですね

(二十八)

そんな私の事を彼はよく見ていたようだった。

お互いが、少しずつ、打ち解けて会話が出来ようになるには、すこし時間が必要だった。

やがて、彼は、気がつくど、軽いジョークも入った言葉をかけて来ている事に久美子は気がついて、とても、気分が楽になった。

朝の早い時間に横尾小屋を出発しているのに、周りの風景が、久美子には少しも変わらないと思えた。

少しの登りでも、足が上がらず、息が苦しい！

体が重くて、まるで全身に何かを括り付けられているように体が重く辛かった。

彼は、ゆっくり、ゆっくり、歩きでいいですよといい！

私の短い足は、ちょっとした、岩の段差がとても辛い！

足が上がらない時は！彼はいつも、言った！

「片足を岩にしっかりと乗せると足が長く伸びます！」

「だから、安心して、岩に足を預けましょう！」

そう言われると、なんだか、そんな気がしてくる！

重い体と、力ない足を、一歩、一歩、上へ、前へ、時には、岩をよじ登るように、私は、登山道と格闘しているような気分になる！

バランスを崩して、よろけそうになると、決まって、彼の力づよい腕が支えてくれる！

「久美ちゃん、上を見て下さい～」

突然、K氏の声がかかる！

遠くに、鯉のぼりが勢い良く、泳いでいるのが見えた！

今から、「久美ちゃんと、呼ばせてください！」

K氏はそう言って、なんだか、久美ちゃんの頑張ってる姿が、僕、嬉しくなっちゃいましたあ～彼は私を元気づけるようにそう言って、それ以降、私を、

『久美ちゃんと呼んでいた！』

私と彼では、親子ほどの年齢差があっても、なぜか、私は嬉しいような気持ちでした。

少なくとも、嫌な感じではなかった。

お互いが、仲間同士のような、錯覚さえ感じていた、今、この山の中では、自然に受け止められる事だった。

昼前に、涸沢に着いたが、もう、これ以上は、久美子は歩けないと思った。

「なぜか、もう充分だと感じた」

彼も、その事を予測していたようで、今夜はここに泊まる予約を入れてありますとニコニコしながら言った。

今は、なにを言われても、久美子は、嫌な気がしない！

涸沢ヒュッテの外のテラスで、ふたりは、生ビールで、カンパイをした。

けれど、久美子は、ほんのひとくち、口に含んだだけだった。

やはり、どんなに、忘れようとしていても、体に住み着いた、がん細胞は、活発に働いていた。

その夜、耐え難い苦しみと痛みで、久美子は持参していた、強い痛み止めを使ったが、なお痛みと不快感はしばらくの間おさまらなかつた、浅い眠りを与えてくれるだけだった。

彼には、久美子の本当の病気の事を伝えてはいなかったが、なぜか、久美子の病気を理解していたようだった。

次の日の下山の時、上高地まで、涸沢ヒュッテの従業員がひとり、一緒について来てくれた。

K氏は、彼は仲のいい友人だから、気にしないで下さいと言ってくれた、今日は休暇で、山を下りる都合があったとも言ってたけれど、久美子の体調を考えて、付き合ってくれた事は間違いなさそうだった。

おかげさまで、久美子は何とか無事に、上高地に下山出来た。

体の疲れは確かにあったが手や足、体の弱りきった筋肉は、何度も、引き連れ、よじれて攣った、その耐え難い痛み、声を出さずに、久美子は泣いた、けれど、そんな事は直ぐに、忘れてしまえる、上手く言葉で表せない喜びが、心の中で沸き起こっていた。

けれど、肉体の痛みや疲れは、なぜか、心地よいものに変化しつつある、心があふれる喜びに打ち震えて・・・

穂高から帰って、しばらくの間、まるで、何かが久美子を包み込んでしまったようなふわふわとした気持ちで、体がとても軽くなった気がしていた。

体調の良い日がつづいて、何かを成し遂げた、

「ご褒美を大自然から頂けたような！」

「不思議な感覚で、はじめて感じた！」

「充実した、幸福感だった！」

時折、涸沢でのお花畑の中を歩いている時のような香しい花の匂いさえ、感じて、あの美しい風

景が、瞳の奥に何処までもつづき、広がる！

それは、昔、私だけが知っていた、あの

『秘密の花園』

と重なり、合わさる！

母の姿と、共に、久美子の心は満たされていた！

心が不安に、揺れる事もない、悔いの無い人生の素晴らしさに感謝した気持ちだった。

思い返せば、久美子の生きた日々は！

苦悩も苦しみも、すべてに価値のある事だった。

ふと、そんな思いにしてくれた！

あれほど、何かを追い、探し求めていた事のすべてが叶えられた気がした。

今、幸福と感謝する日々の中で、時には、久美子は生きているのだと知らせてくれるように、命を実感させる、激しい痛みさえも喜びに変わる！

命を刻む、胸の鼓動が美しいリズムのように・・・

もう、何も恐れることの無い心が虹を描く！

私の生きた六十五年間は素晴らしい人生を彩り！

愛をことう、愛しさを詠った喜びに感謝！！！！

完

愛をこう人（下巻）

<http://p.booklog.jp/book/36488>

著者：みしまゆみこ

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/hsa33712/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/36488>

ブックログのpapier本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/36488>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのpapier（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社paperboy&co.